

メキシコ・グアテマラ国の衣服文化の研究 (第5報)

— 環境温・湿度の適応からみた補助衣について —

中里喜子

(平成2年9月26日受理)

A Study of Clothing Culture in Mexico and Guatemala (Part 5) — Adaptability of Supplemental Clothing to Environmental Temperature and Humidity —

Yoshiko NAKAZATO

(Received September 26, 1990)

はじめに

被服の起源に関して諸々の説があるが、その原点として、環境温・湿度に対する調節を被服によってはかること、人間の美意識を充たす要求があげられるが、長い歴史を経て、現在も着装されているメキシコ・グアテマラ国の衣服文化からも、これらのことを見出すことができる。

第1報¹⁾では、メキシコ・グアテマラ国の環境温・湿度について報告したが、日内変動の激しさに適応させるため、曲率の多い肩部からの放熱を防ぐ衣服文化の工夫の結果として、男子はカミサ(シャツ)とパンタロン(ズボン)の上にポンチョ(サラベ)を着装し、女子はウィピール(貫頭衣)とコルテ(スカート)をファハ(帯)で結んで着装し、その上にレボソ・ケチュケミルを重ねて覆う形式の衣服文化が形成された。そしてそれらは染め・織り・刺繍など美的の面からも価値あるものであるが、^{2)~4)}本報では主として機能面から合理的に使用されている補助衣について報告する。

調査方法

調査方法については、第1報¹⁾に記した。

結果と考察

1. ポンチョ(Poncho)について

メキシコの男子の衣裳といえば、ソンプレロ(つばの広い帽子)とポンチョ(サラベ)姿が、マリアッチの衣裳として代表される。この衣裳は日常生活では17~19世紀にはメスティーン(インディオとスペイン人の混血)

服飾美術学科

の衣裳として、さかんに着装された。

メキシコは亜熱帯に属するが、1000 m~4000 mの高地が多いため、朝夕は冷えこみが厳しく、日中は太陽の強烈な熱を受ける。従ってポンチョ形式の着脱しやすい衣服は便利であり、脇が縫製されていないので、風通しのよい着装にもなる。又夜は毛布となり、野宿することの多いカウボーイ達には重宝であった。⁵⁾

(1) ポンチョの機能

1) 日内の温・湿度変動への適応が可能

① 着脱しやすい形態である。

② 貫頭衣で脇が縫製されていないので風通しのよい着装にもなる。

2) 夜は毛布に早変わりできる。

3) ポンチョを着装して、腰に紐を結ぶことにより、運動機能を高めると共に、物入れの機能や手を暖めることもできる。

(2) ポンチョの着装と装飾性

1) チアパス州サンクリストバル、ツオツィル族は、長方形の布の真中に縦の切れ目を入れただけの簡単な貫頭衣を着ている。女子のウィピールは脇が縫製されているが、男子のポンチョは縫製されていないのが特徴である。緯糸に木綿、経糸にウール(手紡ぎの羊の毛)を使い、経糸が見えない位にきっちりと緯糸を打ち込んで織られている。模様は境目に1段緯糸を経糸に引っ掛けてしっかりと織られている。恰も薄手の絨毯か、厚手の毛布のようである。(写真1-1参照)

2) オアハカ州サカテベック、ミステカ バッハ族は脛位まである丈の長い身頃の裾を、腰に締めた細帯に折り返すように挟んで着装するので、ポケット代りとなる。衿はT字型の切り込みを入れ、前を左右に折って開衿の

ようにしている。袖は袖付と袖口だけを糸で留め、袖下も脇と同様に縫製されていない。細かい動物・鳥・花などが、胸・袖口・半ズボンの裾に刺繍されている。(写真1-2参照)

3) ミチョアカン州バックアロのボンチョ(サラベ)は、スペイン侵略後に完成されたものである。これはメスティソの衣裳である。模様は幾何学模様や単純化した鳥や花などであり、そこに伝統的な図柄の美しさを見ることができる。プレコロンビア時代のインディオ文化の影響を受けている。(写真1-3参照)

4) ハリスコ州・ナヤリ州ウィチョール族は、スペインに侵略される前の衣裳を残している。スペインに侵略される前のメキシコの男子の衣裳は、ロインクロスとケープであった。このケープは一枚の布であり、布端の上の角を前で結ぶだけの物、又紐を付けて結ぶ肩掛け形式の物である。布地が凝っているので、留金やドレープなどの装飾性を必要としなかった。模様は、縞・格子・植物・ヘビなどの動物(神として崇めていた)、魚貝類などを単純化した幾何学模様であった。スペインに征服されるまでの250年余り、強大な国家を築いていたアステカ族の絵文書にも見られるが、地位の高い人は、装飾性の高い物を着装していた。(写真1-4参照)

2. レボソ(Rebozo)について

レボソはスペイン語で身体を覆う布という意味であるが、女子の衣裳の一つである。スペインがアステカ帝国を侵略した16世紀のはじめ、サンルイスボトシ州のサンタマリアデルリオという町に、狩猟民族のチチメカ族が住んでいた。1570年代にスペイン人はこの土地に銀鉱を見つけたため、チチメカ族との間で争いが起り、銃を持っているスペイン人は勝ったものの、その後も反抗を繰り返すチチメカ族に手を焼いた。そこでケレタロ州の温和な農耕民族のオトミ族を移住させ、チチメカ族との混血をはかり、定住化させることに成功した。オトミ族の血を受けた女子は手が器用で、竜舌蘭の繊維をクルミで染めて機織りに励んでいた。これに目をつけた宣教師や商人は、ヨーロッパの糸車を取り寄せ、レースや刺繍をさせ、後には、東洋の絹や絹の技術などを指導したと考えられる。サンタマリアのレボソは18世紀には完成した。レボソの大きさは、Sサイズ…56×180cm, Mサイズ…65×240cm, Lサイズ…75×280cmで両端に30cmずつ付いているフリンジを含めての寸法である。

(1) レボソの機能

レボソは一枚の布であるがために、着付け次第で形が自由になる。メキシコ・グアテマラ国の変化しやすい気温に適応させるのに最適と考えられるが、その他、布の可能性を最大限に生かした機能が備っている。

1) 日内の温・湿度変動への適応が可能

- ① 防寒のため身体に覆う着装
- ② 日除けのため頭部にかける着装

2) 子どもをくんで移動ができる。

- ① 抱く形態
- ② 背負う形態

3) 荷物を包んで移動ができる。

- ① 背中に背負う形態
- ② 頭上に乗せる形態

(2) レボソの使われ方

1) チチカステナゴの木曜市で、マヤ高地民族のキチエ族がレボソに荷物を包んで背負って運ぶところ(写真2-1参照)

2) 同じくキチエ族が、レボソで赤ちゃんを背負ったり、荷物を包んで頭上に乗せて運ぶところ(写真2-2参照)

3) サンチャゴデアテトラン、ストウヒル族は、レボソをショールとして前から後方へむけて首にかけたり、お買物をした野菜を入れたりしているところ(写真2-3参照)

4) チアパス州ユバイナラ、ゾック族は、レボソを頭に巻いて日を除ける(写真2-4参照)

5) その他身に覆う時は、一般的には肩にかけたり、頭から肩を包んだりするが、寒い時は広げてきっちりと身体を包む。おしゃれには次に記すようにさまざまに変化させて楽しむ。

- ① 頭に掛けて前胸もとで振って、左右両肩へ流すようにかける。
- ② レボソの中央に結び目を作って胸に当て、蝶の羽根のように左右の布を広げて両肩にかけて背中へ流す。③
- ③ レボソの幅を5cm位に畳んでウエストに巻いて前で一つ結んで片方の長い方を肩にかける。
- ④ ミチョアカン州タラスコ族は民族舞踊の時、細く折り畳んだレボソの中央を前ウエスト中央に当て、脇下を通して後肩から前肩へまわしバストポイント上から前ウエストへはさんでとめる着装。
- ⑤ オアハカ州のサポテカ族は、ターバンのように頭

に巻く。

- ⑥頭に巻いて額の左側で一振りして、片方へ広げて流す。
- ⑦頭に巻いて額の中央で交差させ左右に広げて流す。
- ⑧頭の後方から包むようにレボソの中心を当て、頭上で何回も振って尖らせ斜め後へ流す。
- ⑨ミチョアカン州タラスコ族はレボソの丈を2つ折りにして「わ」の部分が額にかかるように当て後へ流す。
- ⑩オアハカ州とゲレロ州のムラト（黒人とインディオの混血）はレボソを無造作に頭にぐるぐると巻いている。

(3) レボソの装飾性

1) 縁飾り…サンチャゴ デ アテトラン、ストウヒル族は、大きな毛糸玉のボンボン飾りの付いたレボソを肩に掛けている。（写真3-1参照）

この他に両端を30cm位まくらめレースに編んだ物もある。ミチョアカン州には縁飾りに凝っているレボソが多く、トゥリクアロの物は、手をつないだ人物の図柄にレースが編まれている。ピチャタロの物は、ビーズを一つ一つ編みこんで、人物や動物、植物などの図柄を表現している。

2) 色彩…昔は染料にクルミを使い、鉄や灰で媒染して、主に黒・茶・黄色を出していた。赤はコチニール、青は藍が使われていた。又特殊な花の液に一週間以上糸を浸け、香りを付けることもあった。

3) 織り

①緋…サンクリストファル トトニカファンの藍染の古い緋のレボソ（写真3-2参照）

雨の少ないメキシコでは、水の神への信仰が篤く水の神の象徴とされたのがヘビであったところから、レボソの細かい緋模様はヘビの皮に似ているのである。

②織り込み…サンクリストファル トトニカファルのこのレボソには、ABPIL-16-DE1909という文字が織り込んである。（写真3-3参照）

③羅…ミチョアカン州アランサ、タラスコ族は、今でも羅織りのレボソを織っている。

3. ケチュケミトル（Quechquemiti）について

1) ケチュケミトルとは、一種のケーブ様の貫頭衣で、ワイビールと並んでスペイン侵略前のインディオの女子の衣裳の一つであった。土地によって違いはあるが、共

通点は肩線が45度の傾斜となるため身体の肩部にフィットしやすく、前後に垂れ下がる形式である。単独に着ることもあるが、ワイビールの上にケーブやショールのように重ね着したり、頭に被ったりした。

2) ケチュケミトルの構成と展開について検討した結果、正方形又は長方形の布を組み合せるように折り畳んで見事に構成されている。その展開図を図1から図5までに示した。

①55cm正方の布を2枚織って肩の部分を受けいだ物、又左肩が「わ」になって、右肩のみ受けいだ物もある。（図1参照）

②幅35cm丈55cmの布を2枚直角に置いて接ぎ、左右45度折って組み合せて受けいだ物である。（図2参照）

③幅30cm丈80cmの布を2枚直角に置き、左右の肩の部分を90度に折って組み合せた物、前・後中心は正バイヤスの布目となる。又衿ぐり側より裾側の方が広がるようにカーブ織に織られた2枚の布を同様の構成で受けいだケチュケミトルもある。（図3参照）

④幅55cmの布の衿ぐり部分のみ「コの字」に幅をせまく織られた物。右肩を受けいで左肩は「わ」になり、前・後中心は正バイヤスとなる。（図4参照）

⑤幅50cmの布の衿ぐり部分のみ「コの字」に幅をせまく織られた物。前中心は縦地に後中心は横地になり、左右の肩は45度の正バイヤスどなる。（図5参照）

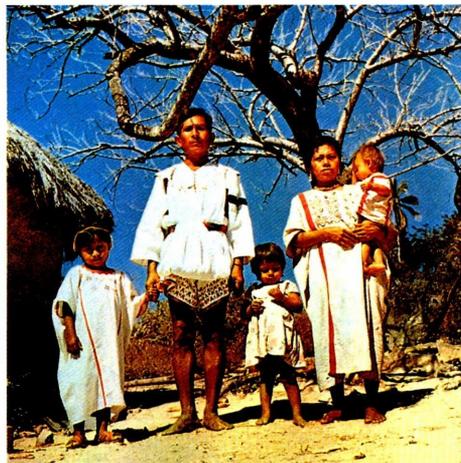
3) ケチュケミトルの構成と着装について、代表となる物を3種選び、写真4に示した。オトミ族のケチュケミトル（写真4-1・図3）、ワステカ族のケチュミトル（写真4-2・図1）、オトミ族のケチュケミトル（写真4-3・図2）

ま と め

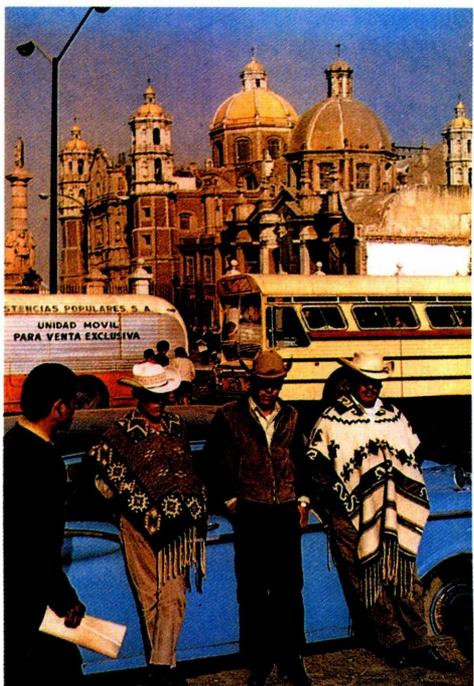
1. 海拔1,000 mから4,000 mにも及ぶ高地にあって、日内の温・湿度差の激しさに適応できる衣服文化が形成され、今日に残されている結果を報告した。
2. ポンチョ・レボソ・ケチュケミトルなどは、環境に適応できる補助衣として着脱しやすく、機能性から見ても構成が合理的である。
3. 使用されている布地は直線に必要な量を織った物であり材料に無駄がない。



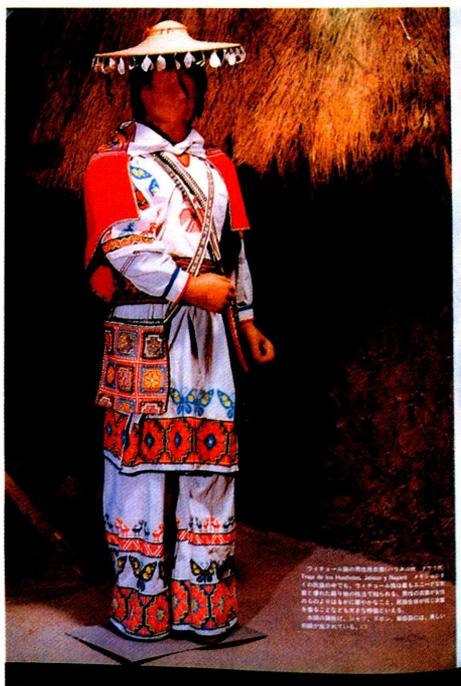
1-1 チャパス州，サンクリストバル，ツオツィル族
ポンチョに紐を締めて胴を物入れにする



1-2 オアハカ州，サンタマリアサカテベック，
ミステカ・バツハ族
ポンチョの丈を長くして裾をベルトにはさみ
物入れにする

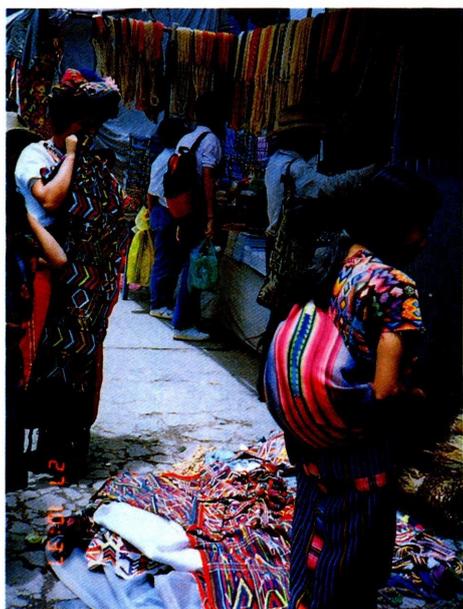


1-3 ミチョアカン州，バックアロのポンチョ(サラベ)
伝統的な図柄がみられる

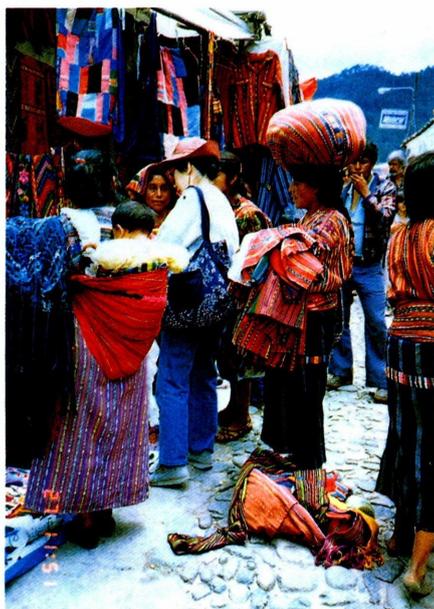


1-4 ハリスコ州・ナヤリ州，ウィチョール族
後からかけて前で結ぶケープ形式

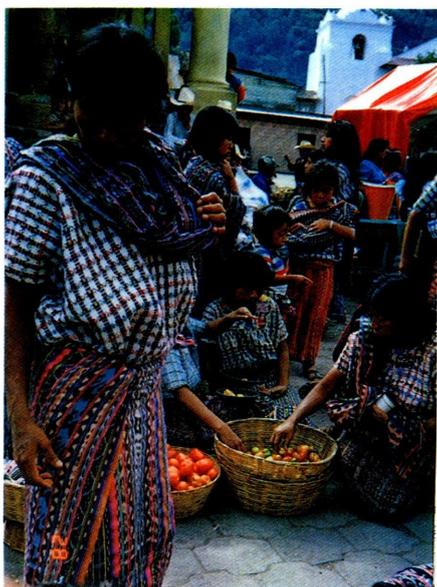
写真1. ポンチョなどの使われ方(男子)



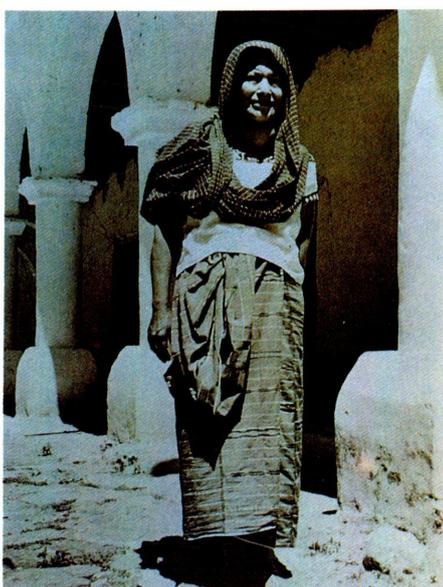
2-1 チチカステナンゴの木曜日
マヤ高地民族キチエ族
レボンに荷物を包んで背負う。



2-2 キチエ族がレボンで赤ちゃんを背負っ
たり、荷物を包んで頭上に乗せて運ぶ。

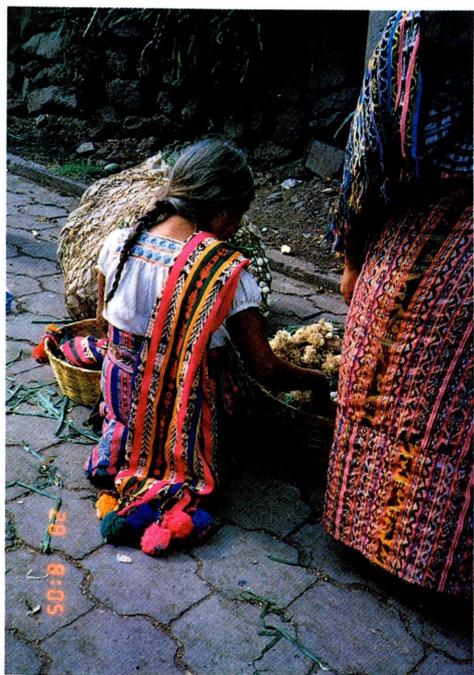


2-3 サンチアゴ デ アテトラン、ストウヒル族
レボンを首にかけたり、お買物したトマト
を入れたりしている。



2-4 チアパス州 ユバイナラ、ゾック族
レボンを頭に巻いて日を除ける。

写真2. レボンの使われ方（女子）



3-1 サンチアゴ デ アテトラン,
ストウヒル族 直線裁ブラウスの上に
大きな毛糸のポンポンの付いたレボソ
をかける



3-2 サンクリストファル トトニカファン
藍染の古い緋のレボソ



3-3 サンクリストファル トトニカファン
ABPIL-16-DE 1909
(1909年4月16日の意)
と織り込んでいる。

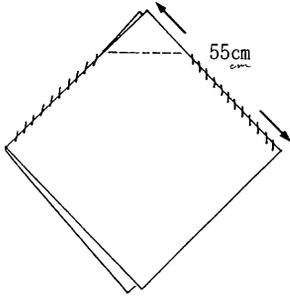


図1. ケチュケミトルの構成と展開その1

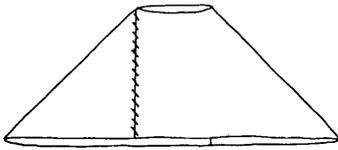
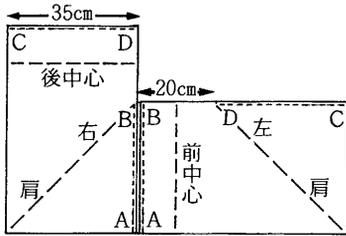


図2. ケチュケミトルの構成と展開その2

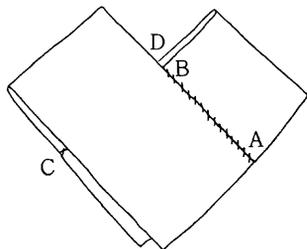
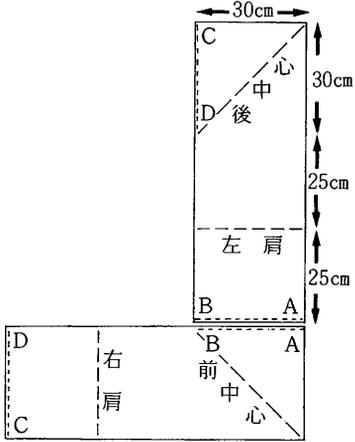


図3. ケチュケミトルの構成と展開その3

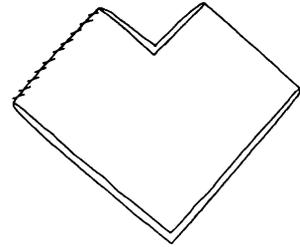
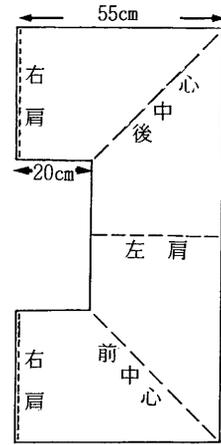


図4. ケチュケミトルの構成と展開その4

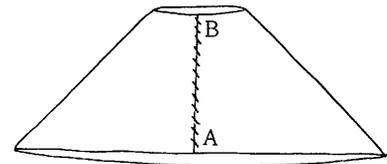
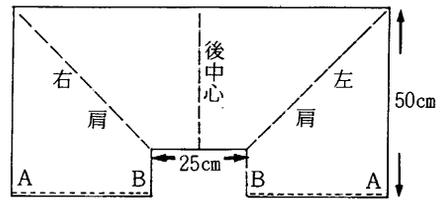
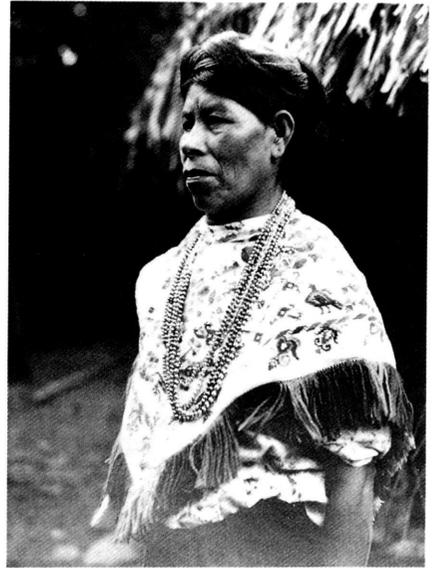


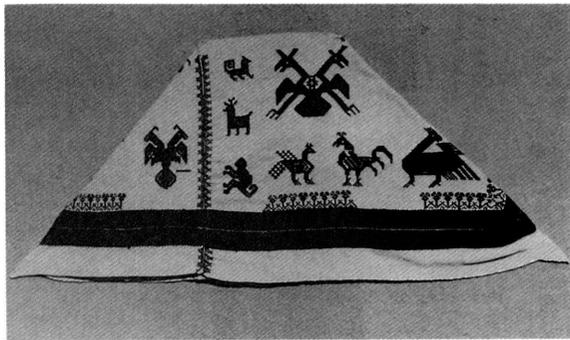
図5. ケチュケミトルの構成と展開その5



4-1 オトミ族



4-2 ワステカ族



4-3 オトミ族

写真4. ケチュケミトルの構成(女子)

4. 多目的に使用できるものである。
5. 装飾性からみても、自給できる素材を使用して、配色よく、美しく織り上げられている。そこは表現された図柄にも伝統的な特長があり、縁飾りにも精巧な技法が取り入れられている。

参 考 文 献

- 1) 中里喜子：東京家政大学紀要，29，195～201（1989）
- 2) 山本良子：東京家政大学紀要，30，73～78（1990）
- 3) 卜部澄子，松山しのぶ：東京家政大学紀要，30，79～85（1990）
- 4) 赤池照子：東京家政大学紀要，30，87～94（1990）
- 5) 世界民族百科9，（株）日本メール・オーダー（東京），（1988），p.1889
- 6) 児島英雄：染織の美28，京都書院（京都），（1984）
- 7) 今成知美：染織の美23，京都書院（京都），（1983）
- 8) 今成知美：染織の美24，京都書院（京都），（1983）
- 9) 今成知美：染織の美25，京都書院（京都），（1983）
- 10) C.L.PETTERSEN：MAYA OF DE GUATEMALA，1・2・4・6，Museo Ixchel，1975